雛　祭　考

Essay on Hina-Matsuri

森　山　和　美

序　文

日本の年中行事には、古くから今日に至るまで伝わる種々の習わしがあるが、中でも女児の祭である三月三日の雛祭は、広く民間に継承されている行事の一つではなかろうか。

雛人形の起源は遠く平安時代にはじまるといわれ、当時は紙製の素朴のものからはじめられたが、時代と共に発展し、享保（1716〜1735）頃には人形としてようやく完成され、現在に至っているのである。またその頃から京雛と同時に江戸雛と称し、江戸でも製作されたが、京雛はあくまで有職にのっとって作成されていたのである。

雛人形が公家風俗を中心に取り入れられたのは、恐らく当時から日本の美の象徴と考えられていたのではなかろうか。

私の家にも祖先から伝わる家宝の見事な雛人形があって、三月三日の節句にはささやかな雛祭をする習わしであるが、私はこの雛を眺めていると、不思議に心が和み、優雅な姿、形、衣裳、調度品に魅せられてゆくのである。そしてこの美しい雛の誕生とか変遷、及び飾り付けを調べてみようと思い立って、この拙ない小論を纒めた次第である。

本　論

日本の伝統的な行事として、古代から現代まで受継がれてきた雛祭は、女児の祝の日として、意義をもっていると思われる。そもそも雛の語源について調べてみるに、古くは雛のことを「ヒヒナ」といっていた。「ヒヒナ」とは生れ出た鳥の子が「ヒヒナ」となくということで、鳥の子は小さいものであり、可愛らしいものの称であると僧契沖は「契沖雑記」の中に説いている。又、源氏物語や枕草子では、よく雛人形をもって遊ぶことが書かれているが、人形を小さく作るのを鳥の雛にたとえて、雛人形とは小さな人形という意味になったのではないだろうか。

さてその雛人形が雛祭となった起源には，種々の説があるが、その中でも中古の雛遊びの遺風としての説、祓と雛遊びが合体した説、（風俗研究第106号，江馬務、雛祭の変遷）などが学

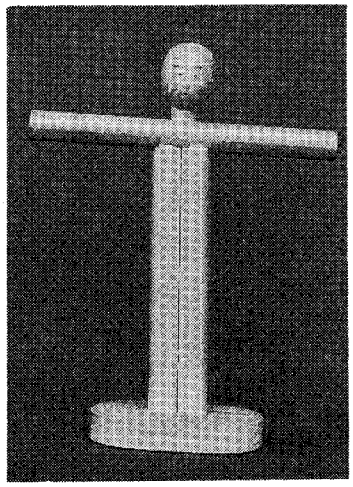
説としては有力ではあるまいか。

平安末期に行われた宮咩祭の人形も雛祭に影響しているようである。この祭は我家の開運を祈る行事であって、最初は季節を選ばなかったが、後には十二月、正月、初午の日に行われるようになった。

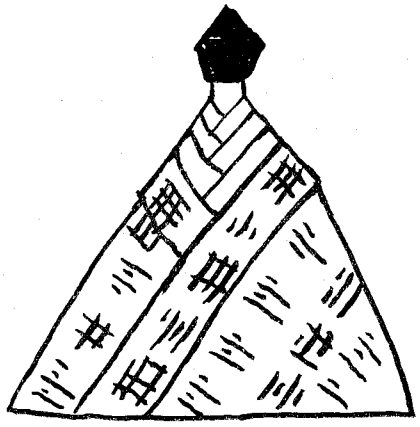
我国では人形を神や精霊の形代として用いた風習があり、また人間の形代としても祓いに用いた。これを人形といって、平安中期から広く行なわれ、作った人形を自分の身代りとして身体を撫でて，汚れや禍いを移し、川や海へ流した。従ってこの人形を撫物ともいった。源氏物語の須磨の巻に、三月巳日に、光源氏が海辺に陰陽師を召して祓いをさせ、人形を船に乗せて流すところがあるが、三月上己や三日に汚れを祓う支那の風習が日本に輸入され、祓いに人形を用いる日本古来の風習と一緒になって、具体化されたものと思う。この人形はまた「あまがつ」ともいわれ、

おほぬさにかきなで流すあまがつは
　　いくその人のふちをみるらん

とあるのもこの人形のことであろう。



天勝（江馬務氏所蔵）

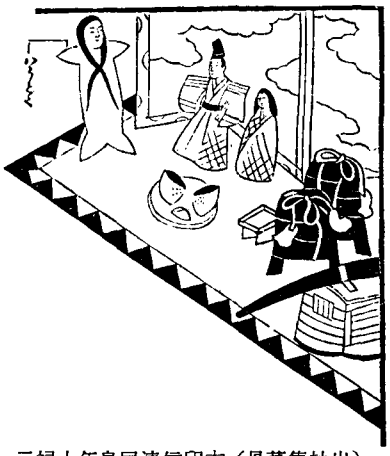


紙雛（沖縄一江馬務氏所蔵）

天勝の形は、竹でT字型の胴体を造り、それに白絹で頭部を作って乗せたもので、これに好みの衣裳を着せて小児の枕元において、厄除けとした。他に古いところでは「草人形」もあって、人の身代りに用いたことは、人形と同じである。日本書記、神宮皇后の巻に見える。

民間では多く紙製の人形を造って、祓いに用いた。現在でも鳥取市や阿波徳島、奈良の吉野川、和歌山の紀の川などに流し雛としてその遺風が残っている。

近世、民間では天勝の代りに這子と犬張子を用いるようになり、這子は主にお産の時の魔除けに用いられたもので、白絹に綿をいれて縫いくるみ、小児の姿に製作した腹ばい姿、或いは坐居の姿、衣裳を着けたのもある。そして天勝と這子を対の物として嫁入道具の一部とし、雛



元禄十年鳥居清信印本（骨董集抄出）
這子他調度品

段にも飾ることが江戸時代の中期過ぎに行われている。之は既に室町時代三月三日に人形を贈呈する風習が生れ、この時代から宮中や武家では三月三日に進上された人形を枕元において、翌朝寺で祈禱、魔除けを祓って、翌年再びこれを用いるようになった。

これはいう迄もなく人形が次第に精巧になった結果である。そして室内に飾るようになり、後世の雛祭の飾りが生まれたとも考えられる。

さて雛祭が三月三日に定まったのは、三月三日は三月上の己(み)の日(ひ)のことで、己は「除日」といって、陰の極まった悪日とされ、この不祥の日は、支那の周の代には人々は、この日、水と蘭草で汚れを洗い清めて厄を祓い延命を祈ったとある。この上己の日が魏(ぎ)により三月三日となったので、この風が日本に伝承されたといわれる。それが慶安（1648〜1652），承応（1652〜1655）の頃らしい。

次に雛祭の飾りものであるが寛永年間（1624〜1644）になって、前述の天勝、這子の外に犬張子も飾ったことが「毛吹草」に記されているが、これは室町時代の雛遊びの影響であろう。飾り方も江戸初期は雛段もなく、畳の上に毛氈(もうせん)などを敷いて雛屏風（高さ七寸（26.5cm）位を背景に、紙雛を並べて天勝、這子をおいた。

調度の品には駕籠、蛤具、行器(ほかい)（赤飯を入れる）蓬餅を入れる絵櫃、甘酒の入った銚子、提(ひさげ)を並べて無事息災を祈った。

町人の経済力が旺盛となった江戸中期享保頃（1716〜1736）には雛段が設けられ，寛政（1789〜1801）頃には二段，明和（1764〜1772）頃には三段となって、段数が増え、緋毛氈を敷くなど、次第に華やいできた。

安永前後頃（1772〜1781）には、富家では五段にする家もあった。このように段数が多くなれば、当然飾りものも多くなり、雛人形はだんだん小さくなる傾向を帯びて来た。また種々の人形も同時に飾られたが、「裸ぼん」といわれる市松人形が出来てから、天勝、這子はすたれ、犬張子をおくようになった。犬張子はもともと室時町代の婚礼用具であったものである。天明（1781〜1789）の頃には随身，五人囃が現れ、ほぼ今日の雛段の形を整えてきた。調度の種類も増し、その調度には武家や町家の生活が

貞享五年印本（骨董集抄出）雛段の形成

あらわれてきている。幕末の守貞漫稿に市中の雛祭の盛んなことについて

「すべて女子に係ることの盛なるは、市中の婦女多く武家に奉公せし者にて、大名の奥向きを見習うが故」

といっている。町家の娘が武家奉公に行って主家の風習や知識を家へ持ちかえるようになったのであろうか。雛祭も武家のものを真似る町家が多かったようである。

江戸後期になって、左近の桜、右近の橘、随身（左右大臣）、女房、伶人（五人囃子）、白丁、雅児、などが加わったが、調度にはお台所道具、膳、椀、煙草盆、火鉢、化粧用具、茶弁当など民衆的なものとなり、雛人形は祭、調度は家具という性格をもつようになった。

明治以後は昔と同じように、女の子のいる家では、三月節句に雛祭をして、親類、知己から雛人形を初節句に贈られ、当日は親しい人を招いて、赤飯、白酒などを御馳走するようになった。今日雛とか雛人形といえば、内裏雛、随身、官女、五人囃子など雛段に飾る人形をまとめていうが、雛人形という言葉は、江戸後期からと思われる。それ以前は雛遊びといった。しかしこれも富家の雛祭であり、一般の家庭は江戸時代と同様に、ありあわせの調度を用いて、段も三段位が最高で、内裏雛の外は、各自が買ってきた人形や、調度類を飾ったが、今日ではワンセットとして売ることが流行しているから、飾り方も一様になり、内裏雛、官女，五人囃、随身、衛士を必ず飾り、紙雛、犬張子は少なくなってきた。組にして売るので、一般の家庭にも雛段、人形、調度が揃うようになった。

菱餅は貞享（1684～1688）の頃から作られた。菱餅の色は水神、龍蛇の嫌いな色とされている。宝暦二年（1752）の「都老子」に

「近年は雛配膳の調度など、殊の外美をつくし、金銀を鏤めなどする事とはなりぬ。然れども貧賤の家には蛤の貝殻に飲食を盛って供するも多し。」

とあるように、蓬餅、甘酒を食したらしい。この甘酒は後世白酒となる。赤飯、蓬餅は初めは家人が食したのであるが、やがて雛に供えるようになって、江戸後期には、祭に変化したようである。

更に次に雛の変遷であるが、人形の源流の項で述べたように、紙雛から発展し、室町時代の紙雛のその姿は、男雛は烏帽子に小袖袴、女雛は小袖に細巾の帯姿で、当時の民間の風俗をよくあらわしている。内裏雛も初めは紙雛のように小袖姿であったらしいが、そのうち男雛は袍、女雛は五衣（いつつぎぬ）の礼服（らいふく）となり、公卿風俗の雛になった。雛人形が次第に大きくなった享保六年（1721）七月には、江戸幕府は雛の寸法を制限する倹約令が出され、「八寸（30.3cm）より上無用たるべし。」と華美になるのを戒めている。また雛市なども開かれ、雛市では古い雛も売られた。京都では、四条、五条の東に、大阪では御堂前、順慶町などにたったという。

雛の古いものには、

室町雛……高さ三寸五分（13.3cm）顔面扁平で横に長く、その特徴は手を左右に拡げ、装束は束帯ともつかず、柄は狩衣風のもの。

室　町　雛（風俗研究106号抄出）

女雛は小袖緋袴で下げ髪を垂らしている。

寛永雛……今日残っている雛の中では最古のもので、寛永（1624～1644）の頃の作。男雛は四寸余（15cm）、女雛は三寸余（11cm）、唐衣も裳もつけず、男雛と同じ裂の小袖を着、紅の平絹の袴、袖を左右にひろげて手が見えないのは、室町雛と同様の姿である。男雛の頭部は墨でぬり、冠は頭と一つの練で作られている。女雛は天冠をかぶらない。

享保雛……寛永雛についで出来た。江戸時代中期享保年間（1716～1736）頃に町家で流行したらしい。形は比較的大きく、高さ一尺五寸（56.8cm）余以上のものまであった。男雛は束帯に似た装束で金の冠、太刀、笏をもち、女雛は五衣、唐衣、裳の姿で古風な天冠をかぶり、檜扇をもっている。袴には綿を入れて膨らませてある。頭には、毛髪があるので、毛髪をつけたのは、この頃からであろう。

次郎左衛門雛……京都の人形師である雛屋次郎左衛門の作といわれこの名称がある。顔が丸く、引き目鍵鼻などが特徴で、男雛は黒袍に窠（くわ）に霞の文様の表袴をはいた公卿の束帯姿である。女雛は、近世の五衣、唐衣、裳の姿で大きさは大小ある。この雛は江戸で宝暦（1751～1764）前後に流行した。

有職雛……親王雛、高倉雛と呼ばれる礼服の衣冠姿や公卿の平常服である直衣姿が多い。顔の彫りも写実的に作られ、直衣を脱がせて束帯に、女雛には十二単衣が添えられ、着せ替えの出来る雛でもある。宝暦年間（1751～1764）京で作られた。

古今雛……明和（1764～1772）の頃江戸で売り出された。装束は、男雛は束帯、女雛は十二単衣で、裂地は金襴、錦のものと、黒の綾綸子、他の織物を用いたものがある。享保雛と有職雛の影響をうけている。そして織物に金糸や色糸で鳳凰や花の丸の縫様文をおいているのが特色である。また天冠は複雑なこしらえとなり、顔も美しく、幕末になると眼球に硝子を用いたものも出てきた。顔の彫は江戸で、塗り仕上げは京都でされ、この時代になってから、商品として多量に売出されて、各家庭の雛祭を賑わせたようである。これから後の内裏雛はこの形にならって作られるようになり、明治以降現在に至るまで、古今雛の型が継承されている。

しかしこれらは武家や富商の家庭のものであって、農村などのものはこんなにはなやかなものではなかった。農家や貧家にあっては、内裏雛も裂製ではなくて、土雛がほとんどではなか

ったかと思われる。天保年間（1830〜1844）の広益国産考にも

「今尾州、三州、遠州辺農家には三月節句に土人形を求めて、衣裳雛と交へり、貧家にては土人形ばかり飾れり。三月前になれば、いかなる貧家にても、女子は親にすがりて雛を求めてくれよとせがむ也。然るに此土人形を求めあたへぬれば、風呂敷などを箱に打ちかけ飾り悦ぶこと限りなし。」

とある。他に土雛も作られたであろうが、土人形とは今の伏見人形の女の人形類ではないかと思われる。

内裏の並べ方は我が国は古来から男雛は向って右、女雛は左である。これは紫辰殿に天皇、皇后がお座わりになる位置に習ったもので、すなわち天皇は向って右、皇后は左というところからきたものである。今日では反対に男雛が向って左、女雛が向って右におかれている場合が多くなってきた。男雛が向って右にあるのが京都式、左にあるのが東京式でこれは外国の風習による置き方ではないかと思う。

以上は雛人形と雛祭の変遷であるが、ここで私の家の雛人形にもふれてみたい。この雛人形は、私が幼い頃から、三月三日の雛祭に飾られ、人形や調度類で遊んだ記憶がある。随分古びた雛人形であるが、これは明治五年生れの私の祖母がまだ幼い頃、祖母の父が京都で買ったものであった。もとの持主は京都の公家の所有であったということらしいが、調度類の箱書の中野というのが、次の持主となり、それを祖母の父が買ったのが、現在に至っている。箱に記入された年号は、嘉永（1848〜1854）で、これは中野氏が公家から買い受けた年号ではないかと思われる。

この雛人形の製作されたのは、もう少し以前では ないかと 推定される。年号は 嘉永と安政（1854〜1860）、文久（1861〜1864）の江戸末期の年代が書かれているが、その理由はわからない。箱の蓋の裏には製作者であろうか。伊藤久重作の焼印が捺されている。雛屏風は（たて39㎝、横93㎝）で、その絵は源氏物語の絵巻らしい。他にたんす、長持、触台、膳、椀、盃、それに化粧用具一式、駕籠などの調度類があり、何れも黒漆塗に家紋が入っている。

男雛の大きさは、高さ約27㎝、顔の寸法7㎝、巾36㎝、奥行31㎝で、装束は平安時代の公卿の礼(らい)服の束帯姿で、冠、袍、下襲、袙(あこめ)を着用、袴は外に表袴、下袴、平緒、太刀を帯び、手には笏を持つ座雛である。袍は黒地雲立涌の有職文様のある絹布で作られ、表袴は、白地に窠に霞紋、単の紅の平絹が見え、綿を入れて膨らませてある。裾(きょ)の長さは36㎝である。

女雛は 高さ約27㎝、顔の寸法6㎝、奥行31㎝で装束は 平安時代の女子の正装である十二単で、唐衣、表着、裳、五衣(いつつぎぬ)、単、緋の袴を着用している。袴は綿を入れて同じく膨らませてある。白地に幸菱文(さいわいびしもん)の単、繁菱文(しげびし)の五衣、本緋色の表着の袖には古今雛の特徴でもある、花の模様の刺繍、金糸や色糸の珠の刺繍文様がある。薄桜色の唐衣は綸子のような布地に、これにも花模様の刺繍がさしてある。複雑な装飾のある天冠、檜扇を持ち、髪は下げ髪である。男女雛とも容貌はリアルで、眼球には硝子を入れてあるのか、黒く光っている。

正統なる古今雛である。繻綱縁(うんげんべり)の畳の台（高さ4㎝）に座っているがこのような畳台は寛政の頃（1789～1801）からあったらしい。女雛の衣裳の色には、本緋、白、朱赤、薄萠黄、玉子色、薄桜、洗朱(あらいしゅ)などの色が用いられ、当初はさだめし美しかったことであろう。この雛人形から推察すると、今日の雛人形の形式は、江戸時代後半に発展し、確立したように思われる。そして、その優雅さと芸術的の原動力となったのは、京都の公家文化の伝統と、江戸の庶民の経済力があったからであろう。

江戸時代には盛んに行なわれた雛祭行事も、明治六年に五節句（正月七日、三月三日一雛祭、五月五日一端午節句、七月七日一七夕、九月九日一重陽節句）が廃止された記録があって、一時衰退を来たしたが、20年頃から欧米文化一辺倒に反発する風潮が漸次盛んになってきた。明治末期から大正時代新たに出現した各デパートが雛人形を売出し、ますます雛市は賑やかなものとして、昭和時代の現在につづいている。戦後は雛人形も高級なものとなり、雛段飾りも年々豪華となって、七段飾りの十五人、十八人、二十一人飾りなどが出てきたが、半面団地サイズのガラスケース入りの雛、プラスチック製の雛なども出てきた。又このような衣裳雛のほかに農村などで飾られた土雛も現在全国各地に郷土玩具として、その姿を残している。その他種々の変り雛も作られ、雛の容姿、服装などに新らしい造型を創案した美術的なものも作られるようになった。

む　す　び

以上述べたように雛祭の由来は古い時代からあって、江戸時代初期になって形が整い、時代を経るに従い盛んとなったものである。

男子の端午の節句とも対照して、女子の節句として、今日も尚、隆盛に行われている。

明治以降の近代商業の発展を通じて、現在のような様式となったが、雛祭が千年もの長い間、絶えることもなく発展してきたのは、これがただの人形遊びでなく、子供から災を取り除き、その健かな成長を願うという上己の節句の意義が、もとにあったからである。

雛人形の変遷は、同時にその時代の社会背景、及び世相などを考えることが出来るのは、興味が深かい。私達はここで雛祭の意義を正しく認識して、日本の伝統行事の一つである雛祭を、後々までも伝え残してゆきたいと思う。

又我が家の雛人形も、雛としても逸品である（故吉川観方氏の認定）が、また芸術品としてもその価値を見直し、大切に保存しなければならないと痛感した。

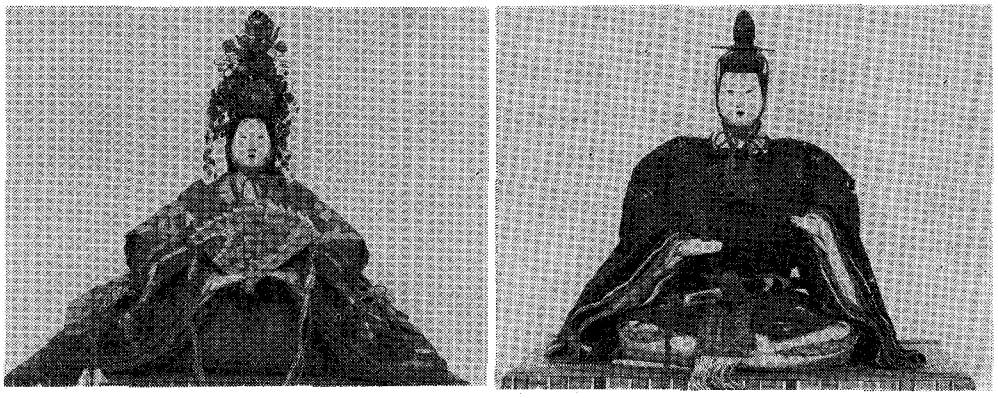
現代さまざまな形で、種々の雛人形が飾られるが、それは古代も現代も雛祭が私達の生活の中に生きつづけているからである。

終りにこの小論は自分としても少なからず不備な点が多いので、今後更に研究を深めたいと思っている。

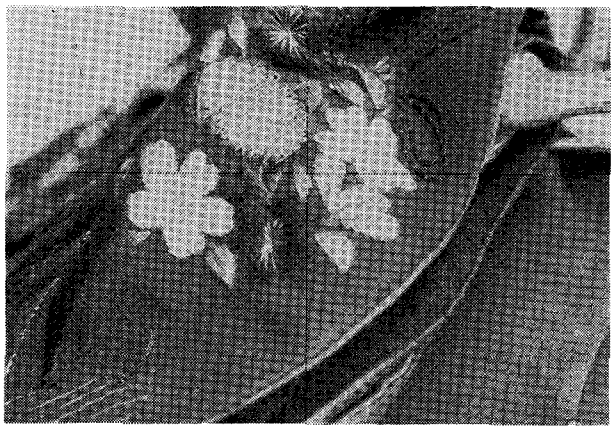
享　保　雛　（江馬務氏所蔵）

次郎左衛門雛（毎日新聞社発行―名家秘蔵雛と雛道具）

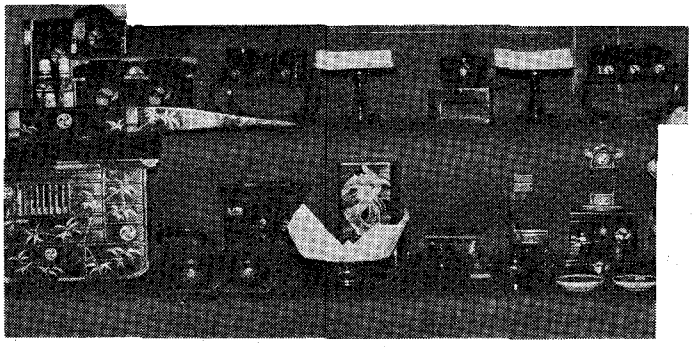
有　職　雛（毎日新聞社発行―名家秘蔵雛と雛道具）



古　今　雛（自　蔵）



古今雛袖の文様（自蔵）



調　度　品（自　蔵）

参　考　文　献

江馬　務　江馬務著作集第八巻　中央公論社(1977)
江馬　務　風俗研究　106号　107号154号風俗研究会(1929)
坂本　太郎　監修　風俗辞典　東京堂出版(1957)
石崎　忠司　きものの文様　衣生活研究会(1973)
山田徳兵衛　人形芸術　創元社(1953)
〃　日本人形史　冨山房(1942)
〃　新編日本人形史　角川書店(1961)
河鰭　実英　日本服飾史辞典　東京堂(1969)
斉藤　良輔　ひな人形　法政大学出版局(1975)
名家秘蔵雛と雛道具　毎日新聞社(1979)
和歌森太郎　年中行事　至文堂(1974)
樋口　清之　まつりと日本人　家の光協会(1973)
有坂与太郎　日本雛祭考　建設社(1977)
百家説林　吉川弘文館(1910)

（本学助教授―実習和裁）